

# 「接続表現」形式に見る20～60歳代の 日本語母語話者の会話管理

— 日本語の座談会を資料として —

呉 秦 芳

## 1. はじめに

日本語学習者の発話は学習が進むにつれて、より多く表現や語彙を運用して、さまざまな機能を果せるようになることが期待されるが、そのためにはいくつかのことが結びついた複雑な構文の駆使も必要になってくると思われる。OPI (Oral Proficiency Interview) <sup>1)</sup> の基準によると、上級と認定されるのに必要な「文法」は、「談話文法を使って統括された段落が作れる」を設定している。つまり「自己発話力」<sup>2)</sup> を身につけることである。統括された段落を作るのに必要不可欠の要素の一つは、接続表現の運用であると思われる。それは、談話運営能力の一つであると言ってもよいだろう。

本研究では、筆者が設定して、実施した日本語母語話者の実際の座談会を録画したものを文字化し、それらを談話資料として、「会話管理」<sup>3)</sup> の観点から検討した。特に、20歳代～60歳代の日本語母語話者が用いる「接続表現」の形式と機能に着目し、談話内容を支えるストラテジーについて事例研究を行った。

## 2 調査概要

### (1) 調査目的

日本語母語話者の自然な発話場面での接続表現の使用実態と機能を明らかにし、年代との関わりを検討する。

### (2) 調査方法

本調査は実際の座談会を録音し、文字化したものを調査対象とした。この文字化した資料の中から「接続表現」をピックアップして、分析、考察を行った。文字化の際には、「改定版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(宇佐美 2003) に従って文字化した。年代により、どんな形式、どんな機能の接続表現が用いられるかを調査した。本稿では、データに現れた接続表現の機能に焦点を絞り、各種の接続表現が談話の中で現れてくる位置、談話の内容との関わりから、日本人母語話者の会話管理を明らかにしようと試みた。

### (3) 調査対象

(表 1) 調査データについて

年齢層 項目	若年層 20 歳代グループ (8 人)	壮年層 30 歳代・40 歳代グループ (6 人)	中年層 50 歳代・60 歳代グループ (5 人)
被調査者属性	山口大学学部生	中国語講座の受講生	一般の社会人
座談実施日	2005. 6. 3	2004. 7. 14	2005. 6. 30
場所	演習室	演習室	会議室

#### (4) 調査内容

年齢層別の比較対照を行うため、話題はいずれの年齢層でも「夫婦別姓について」に設定し、録音時間は 30 分間に限定した。三つの座談会においては、それぞれ一人の司会者を立てた。ただし、会話の中では、その司会者をそれぞれ、MACHI (20 歳代グループ)、KAN (30~40 歳代グループ)、SUGI (50~60 歳代グループ) と略記した。本稿では、座談会の場面における日本人母語話者の「自己発話力」の接続表現を考察するため、司会の発話部分を(表 1)に入れないようにした。

### 3. 談話レベルの「接続表現」に関する先行研究

これまで、文論の領域を超え、さらに談話レベルにまで伸張させる「接続表現」に関する先行研究は多くはない。現在の日本語教育では、また、「接続表現」はもっぱら独話場面における論理展開の一手段として位置付けられているのが現状であろう。コミュニケーション能力の開発を目的とする日本語教育が呼ばれている現在、接続表現がグループでの会話においてどのような役割を果たすかを把握しておく必要がある。

真田他 (1992) は、「ことばの変異に関係する社会的な変数はさまざまあるが、その中でも、年齢差は最も重要な変数の一つである」と述べている。各種の社会言語学的調査の結果からも、年齢と言葉との相関が見られるデータは、数え切れないほど多数にのぼる。

このような状況を鑑み、本研究はグループの会話における、「年齢差」(20 歳代~60 歳代)に現れる接続表現の形式と機能に着目し、その使用実態などの様相から、会話管理のストラテジーを探る。この点に、本研究の特徴と独創性がある。本研究の考察をひとつのきっかけとして、多様な領域での多様なアプローチを期待したい。

### 4. 接続表現の定義と種類

接続表現について、森田 (1985) は「機能上、先行する表現 (前件) を受けて、後続する表現 (後件) を展開する働きを持つ語である」と定義している。野田 (2002) は、接続表現とは、「文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文論の接続語、接続句に対する概念である」としている。

本研究は、文章だけではなく、談話における接続表現も対象とするため、その範囲は、文章論の接続語句よりもさらに広い、接続詞相当の働きをする副詞や名詞、連語、句・節・文・段レベルの表現まで含んでいる。

## 5. 結果と考察

### 5.1 分析方法

接続詞、接続助詞、又は、それに類似したものの中から、加藤（1984）の分類を参考に、次の三つの意味を持つものを選び、それらの使用形式頻度はパーセントとして表した。各年齢層における使用する接続表現の形式と頻度に関しては、(表 5) を参照されたい。「ば」、「たら」、「と」なども接続表現の一つなので、本研究では加藤の種類のほかにも、これも接続表現の種類として付加する。データに現れた接続表現を以下の通りに整理してある。

- 1) 逆接の接続表現 ても/でも、けれども、が、のに
- 2) 因果の接続表現 から、ので、だから/ですから<sup>4)</sup>、テ形
- 3) 継起の接続表現 それで、で、という、し、それから/から/そして<sup>5)</sup>、テ形
- 4) 条件の接続表現 ば、たら、と、なら

(表2)20歳代における使用する接続表現の形式と頻度

話者 項目	KAT	KUR	YOS	SUG	SAK	TCA	ANA	SHI	総数	
逆接	でも	0(0%)	5(22.8%)	3(11.1%)	1(12.5%)	0(0%)	1(4.2%)	0(0%)	1(2.8%)	11(6.8%)
	けど	0(0%)	4(18.2%)	1(3.7%)	4(50%)	2(28.7%)	7(29.2%)	5(25%)	2(5.6%)	25(15.4%)
	が	5(27.7%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(2.8%)	6(3.7%)
	のに	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(2.8%)	1(0.6%)
因果	から	1(5.5%)	1(4.5%)	0(0%)	2(25%)	1(14.2%)	0(0%)	1(5%)	0(0%)	6(3.7%)
	ので	3(16.6%)	0(0%)	1(3.7%)	0(0%)	0(0%)	4(16.7%)	4(20%)	6(16.7%)	18(11.1%)
	だから	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(5%)	0(0%)	1(0.6%)
	テ形	1(5.6%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	2(28.7%)	4(16.7%)	1(5%)	4(11.1%)	12(7.4%)
継起	それで	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	2(5.6%)	2(1.2%)
	で	0(0%)	0(0%)	1(3.7%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	2(5.6%)	3(1.9%)
	という	2(11.1%)	2(9.1%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	3(12.5%)	1(5%)	2(5.6%)	10(6.2%)
	し	1(5.6%)	2(9.1%)	4(14.9%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	3(15%)	1(2.8%)	11(6.8%)
	そして	0(0%)	0(0%)	1(3.7%)	0(0%)	0(0%)	2(8.3%)	0(0%)	1(2.8%)	4(2.5%)
	テ形	2(11.1%)	4(18.2%)	10(37%)	1(12.5%)	1(12.5%)	0(0%)	0(0%)	9(25%)	27(16.7%)
条件	ば	0(0%)	1(4.5%)	1(3.7%)	0(0%)	1(14.2%)	1(4.2%)	2(10%)	0(0%)	6(3.7%)
	たら	1(5.6%)	0(0%)	3(11.1%)	0(0%)	0(0%)	1(4.2%)	1(5%)	4(11.1%)	10(6.2%)
	と	1(5.6%)	3(13.6%)	2(7.4%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	6(3.7%)
	なら	1(5.6%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	1(4.2%)	1(5%)	0(0%)	3(1.8%)
総数	18(100)	22(100)	27(100)	8(100)	7(100)	24(100)	20(100)	36(100)	162(100)	

(表 3) 30 歳代～40 歳代における使用する接続表現の形式と頻度

項目	話者	END	TUKI	SARU	BI	SAI	HACHI	総数
逆接	でも	0 (0%)	3 (9.6%)	2 (2.8%)	0 (0%)	1 (4.8%)	0 (0%)	6 (3.5%)
	けど	5 (20%)	6 (19.4%)	20 (28.2%)	3 (13.7%)	4 (19%)	2 (50%)	40 (23%)
	が	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	のに	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
因果	から	0 (0%)	2 (6.5%)	7 (9.9%)	1 (4.5%)	0 (0%)	0 (0%)	10 (5.7%)
	ので	2 (8%)	1 (3.2%)	0 (0%)	2 (9.1%)	1 (4.8%)	0 (0%)	6 (3.4%)
	だから	1 (4%)	2 (6.5%)	6 (8.5%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	9 (5.2%)
	テ形	1 (4%)	1 (3.2%)	6 (8.5%)	2 (9.1%)	4 (19%)	0 (0%)	14 (8%)
継起	それで	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	で	1 (4%)	0 (0%)	3 (4.2%)	2 (9.1%)	2 (9.5%)	0 (0%)	8 (4.6%)
	という	0 (0%)	3 (9.6%)	3 (4.2%)	1 (4.5%)	0 (0%)	0 (0%)	7 (4%)
	し	1 (4%)	1 (3.2%)	2 (4%)	0 (0%)	1 (4.8%)	0 (0%)	5 (2.9%)
	そして	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	テ形	6 (24%)	6 (19.4%)	8 (11.3%)	7 (31.8%)	4 (19%)	2 (50%)	33 (19%)
条件	ば	1 (4%)	0 (0%)	5 (7%)	0 (0%)	1 (4.8%)	0 (0%)	7 (4%)
	たら	4 (16%)	4 (12.9%)	5 (7%)	0 (0%)	2 (9.5%)	0 (0%)	15 (8.6%)
	と	3 (12%)	2 (6.5%)	3 (4.2%)	3 (13.7%)	1 (4.8%)	0 (0%)	12 (6.9%)
	なら	0 (0%)	0 (0%)	1 (1.4%)	1 (4.5%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (1.2%)
	総数	25 (100%)	31 (100%)	71 (100%)	22 (100%)	21 (100%)	4 (100%)	174 (100%)

(表4) 50歳代～60歳代における使用する接続表現の形式と頻度

話者		HAM	UCH	MI	HAS	HIG	総数
項目							
逆接	でも	2(5%)	1(5%)	2(2.8%)	1(3.1%)	2(14.3%)	8(4.5%)
	けど	6(15.4%)	6(30%)	6(8.5%)	8(25%)	5(35.8%)	31(17.6%)
	が	1(2.6%)	0(0%)	1(1.4%)	0(0%)	0(0%)	2(1.1%)
	のに	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
因果	から	0(0%)	1(5%)	5(7%)	2(6.3%)	1(7.1%)	9(5.1%)
	ので	1(2.6%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	2(14.3%)	3(1.7%)
	だから	3(7.7%)	1(5%)	5(5.6%)	0(0%)	1(7.1%)	9(5.1%)
	テ形	2(5.1%)	0(0%)	2(2.8%)	2(6.3%)	0(0%)	6(3.4%)
継起	それで	0(0%)	0(0%)	1(1.4%)	0(0%)	0(0%)	1(1.1%)
	で	2(5.1%)	3(15%)	7(10%)	1(3.1%)	1(7.1%)	0(0%)
	という	1(2.6%)	0(0%)	2(2.8%)	4(12.5%)	0(0%)	7(4%)
	し	2(5.1%)	0(0%)	2(2.8%)	0(0%)	0(0%)	4(2.3%)
	そして	0(0%)	1(5%)	1(1.4%)	2(6.3%)	0(0%)	4(2.3%)
	テ形	12(30.8%)	3(15%)	32(45.1%)	4(12.5%)	2(14.3%)	53(30.1%)
条件	ば	3(7.7%)	1(5%)	1(1.4%)	4(12.5%)	0(0%)	9(5.1%)
	たら	3(7.7%)	1(5%)	5(7%)	1(3.1%)	0(0%)	10(5.7%)
	と	1(2.6%)	2(10%)	0(0%)	3(9.3%)	0(0%)	6(3.4%)
	なら	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)	0(0%)
総数		39(100%)	20(100%)	71(100%)	32(100%)	14(100%)	176(100%)

(表5) 各年齢層における使用する接続表現の形式と頻度

接続表現	逆接の接続表現	因果の接続表現	継起の接続表現	条件の接続表現
年齢				
20歳代	26.5%	22.8%	35.3%	15.4%
30・40歳代	26.5%	22.3%	30.5%	20.7%
50・60歳代	23.2%	15.3%	47.3%	14.2%

以下は「逆接の接続表現」、「因果の接続表現」、「継起の接続表現」、「条件の接続表現」の四つに分けて、年齢によりその接続表現の使用傾向及び機能を検討していく。

### 5.1.1 逆接の接続表現

(表4)から、「逆接の接続表現」が50歳代・60歳代より20歳代～40歳代においてはやや多用されることがわかった。「逆接の接続表現」の中では、「けど」という接続表現が他の接続表現が最も使用されている。特に30歳代は他の年齢より多く使用する傾向があるようである。

#### (例1) 30歳代の座談会

SAI: 私は一、自分のことだけを考えれば一、別に別姓でもいいんじゃないかなと思ってるんですね。で、すごい手続きとか一、あの、大変だし、あの、名前が変わるっていうことは、私は逆に抵抗があつて、別に変わらなくてもいいんじゃないがあつて、で、私は今も働いているんです(けども一 (A)、あの、旧姓のままずっとやってまして、一回会社をやめて、また戻ってきてまた旧姓で戻ってきたんですね。(笑) まあ、特殊で同じ会社にいるからっていうのもあるんです(けども (B)、あの、でも一、こう、やっぱり、こう、いろいろ記事とか読んで思うんです(けど (C)、子供のことを考えたら、やっぱり同じ名前でのいたほうが、なんか、家族という気がするかなと思ってるんで、どちらでもいいと言ったら、あれです(けど (D)、(笑) 特に、んん、人それぞれの思いがあるので、したい人は変えればいいし、変えたくない人は変えなければいいかなとは思ってます(けども<sup>6)</sup>。

接続助詞はもともと、節と節をつなぎその関係を表すという機能を持つが、談話場面においてはそのような機能を持つはずの接続助詞が後節を伴わない形で用いられることも多い。(例1)に示すとおり、前後の文脈を分析すれば、(A) (B) (C) の「けど」は、従来指摘されてきた「逆接」というより、自分の意見をぼかし、「やわらげ」の機能を持ちながら、談話展開に関する機能を持つと見られる。さらに、自信のなさも読み取れる。(D) の「けど」は前の文から考えて普通はそうなるとは思えない文が後に続く(逆接)。このように、「しかし」より前件を認める気持ちが強いだけでなく、話題を提示し、やわらかい感じがするので、座談会の場面によく現れることが考えられる。

### 5.1.2 因果の接続表現

年齢別の使用率を比較すると、20歳代は他の年代より、この因果の接続表現を若干多く使われる傾向にある。

#### (例2) 20歳代の座談会

TAC: (前略) 家庭の外に出た時に、どういう風に見られるかっていうのが気になるっていうのが、出てたんですけど、ソノ、ナンカ、家庭の中だと、別に、アノ、お父さんとお母さんの名前が、マア、別であるとしても、そんなに気にすることはないと思うんですけど、やっぱり、家庭の中だけで生きているわけではない(ので、ウン、外の時間が、やっぱり、多い(ので、うん、二十年間ぐらい、そういう、別姓ではない世界で暮らしてきたんで、うん、今更、ちょっと、変えられないと思います。

「夫婦別姓」というテーマに対して、未熟で、人生経験が乏しい若年層の20歳代は自身の主観的な経験を言えず、(例2)からわかるように、TACさんは「ので」を用い、「家庭の中だけで生きているわけではない」、「外の時間がやっぱり多い」などいくつかの客観的な理由<sup>7)</sup>を述べている。

### 5.1.3 継起の接続表現

スクリプトに目を通してみると、どの年齢でも、「継起の接続表現」の部類の出現度が最も高い。その中に、最も注目されるのは、「テ形」の使用である。このような数値をみると、テ形を多く使って短い節を連続させ、思い出したことを時々付け加えながら文末にたどり着く傾向にあると思われる。すなわち、自分の言いたいことを模索しながら発話を進める日本人の談話スタイルが浮かび上がってくる。(表4)に示したように、テ形の使用率については、50歳代・60歳代の使用率が他の年齢層より高く、半分近くを占めている。その理由は「夫婦別姓について」という話題に対して、50歳代・60歳代は人生経験を積んでいることに加え、テーマが具体的であるため、皆積極的に発言

し、「テ形」を用いて長文になりやすい傾向にある。(例3)のように、接続の「テ形」は前節と後節の論理関係を考えず文を簡便につなげる時に用いられやすいため、HAMの例のように、夫の過去の事情を思い出しながら文を作るといったような際によく使われるのではないかと。

(例3) 50・60 歳代の座談会

HAM: アノ、夫が折れてくれました。で、アノ、私の姓の方に、アノ、変えてくれたんですね。私はマア、それはそれでとても感謝して、アノ、仕事上いろいろな、アノ、問題もあるだろうなあと思いつつも、マア、夫の方に甘えて、アノ、ずっと暮らしてきました。今は、もうすっかり馴染んで、アノ、私の姓、浜田っていうんですが、浜田の方が自分の、アノ、生まれたときからの姓のような、アノ、気がすると言ってくれるぐらい、馴染んできましたけれども、やはり、そのときには、相当葛藤があったんじゃないかと、あの、まあ、推測しております。マア、私の経験と云えば、その程度なんですけれども。夫婦別姓という国であれば、まあ、こういう悩みがなかったらなあと思いました。

「テ形」以外では、口頭接続詞の「で」が目立つ。川合(2003)によれば、「で」は「それで」の異形で、話し言葉特有の接続詞である」と述べている。

年齢層が高ければ高いほど、「で」の使用は多くなることがわかる。「で」は実に多様な意味を表すが、いずれの用法にも普遍的に認められる基本的意味は「基準を合図する」(大竹1999)ことである。例文を見てみると、高年齢層の人は他の年齢層より「で」を多く用いることにより、自分あるいは相手の話を促す。「で」は話を続けようという自己への励まし、あるいは、話はまだ続いているという、相手に対するサインであると言えよう。それは、Jefferson(1972)が論じる「脇連鎖」<sup>8)</sup>の機能だと考えられる。

(例4) 50 歳代・60 歳代の座談会

MI: はい、私はずっとシングルできて、アノ、結婚したいんだけどどういうわけか。シングルで、㉔、逆に私はだから、夫婦別姓としての、客観的な立場で、こう見て、友達とか、親戚とか、そういったのを見て。確かに、コウ、ややこしいですね。結婚して名前が変わるわけなんです、㉕、名前、いちいち名前が変わったら、名前が変わりましたって。挨拶状やなにか来ないかぎり、こう分からないわけですよ。㉖、長い間、私も仕事をやってきていましたけど。仕事をやる上でもアノ、結婚して名前が変わるっていうのは何かすごく、やっぱりやりとりしづらかったし、何かと社会的にも不便だなあって。㉗、ただ、日本のそういった、あの、代々家を継ぐっていう文化ですね。Cultureが家族制度がああ、ずっと根強いもんですから、本当に、女の子だけ生まれたら、家がナンカ、どっちが家を継ぐかって名前を継ぐかって、けっこう、(後略)

5.1.4 条件の接続表現

表にみるとおり、「条件を表す機能」を持つ接続表現については、30歳代・40歳代においては比較的多く用いられる傾向が見られる。その中で「たら」はどの年代においても、ほかの「ば」、「と」より多く用いられているが、後件には話し手の意志、命令、依頼などがあるとき広く使えるという利点を持っているからではないだろうか。

(例5) 20 歳代の座談会→後件に話し手の意志が来る「たら」

YOS: それは、うまいことやるよ。(笑い) ああ、お父さんの方、あれやって、下の名前一つ、ぽっと付けるとかしたら、いいと思いますし、その辺は、制度的にも、どうでもできる、と#####。<sup>9)</sup>

(例6) 50 歳代・60 歳代の座談会→後件に話し手の依頼が来る「たら」

HA: じゃ、そろそろ、アノ、子供が、アノ、小学校に上がるまでに、アノ、変えた方がいいだろうから。変えなければいけないんだたら、今、変えようというので、アノ、夫が折れてくれました。で、アノ、私の姓の方に、アノ、変えてくれたんですね。私はマア、それはそれでとても感謝して、アノ、仕事上いろいろな、アノ、問題もあるだろうなあと思いつつも、マア、夫の方に甘えて、アノ、



ずっと暮らしてきました、今は、(後略)

また、30歳代において、「と」の使用が多いことが注目される。「と」の用法について、田中(1984)は、「前件の直後に引き続いて起こる事象を結びつけ、それはさらに定常的な事象の接続への広がりを持っている」と述べている。

#### (例7) 30歳代の座談会

ENO: 普通電話に出るとき、はい、何とかです。出る習慣あるんだから、

KAN: あっ、間違った、切っちゃった。

ENO: アノ、そういう訓練でもう決まってるところだったらー、ミスギャップ、日本でそういうふうに言われる<sup>□</sup>と、あっ、間違ったかになっていような、かもしれない。

(例7)に示されるように、前件の条件を満たすとき、話者は「〜と」を用いることによって、いつも自動的に直ちに後件が成立すると主張しようとしていると考えられる。

## 6. まとめ

本研究では、年代別に注目し、これを切口に接続表現の特徴とそれに関する会話管理の方法を分析した。明らかにしたことについてまとめてみると、各接続表現の、年齢別最高使用率は以下の通りである。

- 1) 逆説を表す機能→20歳代-40歳代
- 2) 因果を表す機能→20歳代
- 3) 継起を表す機能→50歳代-60歳代
- 4) 条件を表す機能→30歳代-40歳代

まず、年齢層が高いほど、「継起の接続表現」の「テ形」の使用率は高い傾向が見られる。また、「因果の接続表現」の「ので」の使用について、若年層の方が多く現れている。なお、「逆説の接続表現」の「けど」はどの年齢層でも利用の割合が多い。さらに、「条件の接続表現」のカテゴリでは、「たら」と「と」の使用は30歳代・40歳代は他の年齢層より頻出する傾向が見られる。さらに、「接続表現」の文法機能を理解することを通し、年代との関わりを究明し、日本人母語話者の会話管理の方法を明らかにした。

附記: 本稿は、台大日本語文創新国際學術研討会における口頭発表の内容に加筆・修正を加えたものである。会場で数々の貴重なご教示を賜わった。座談会に協力していただいた方々、ならびに、文字化のチェックしていただいた方々に、心より感謝を申し上げる。

## 注

1) 牧野他(2001)によると、OPI(Oral Proficiency Interview)とは、「外国語学習者の会話のタスク達成能力を、一般的な能力基準を参照しながら対面のインタビュー方式で判定するテスト」を言う。

2) 梶村(2004)によれば、「自分の考えていることを自分なりに伝える日本語力」、いわゆる「自己発話力」が必要だとされている。梶村(2004)の定義を踏まえながら、本研究で扱う「自己発話力」とは、「話し手の交替(turn-taking)を行いながら情報を共有するのではなく、自分あるいは相手が話題を持ち出し、自分が主導権を握ったまま一人だけである相手に伝える『段落』レベルの発話持続能力」のことである。つまり、上級レベルの談話能力である。

3) 「会話管理」について、筆者は、メイナード・K・泉子(1993)の定義を参考した上で、「会話において、

話し手と聞き手とが相互に働きかけることによって、会話を作り上げていくこと—会話参加者が会話に参加するに当たって、適宜、あいづちやフィラーなどを行い、適切な接続表現・文末表現などを用いることによって、話者交代を円滑に行うこと—であると考え、以下、その意でこの語を用いる。

- 4) 「だから」と「ですから」、両者の機能とも「前のことの当然の結果として後の事柄が起こるとい話し手の判断を表す」語である。ただ「ですから」は「だから」より丁寧度が高いだけなので、同じ項目に入れた。
- 5) 「それから」、「～から」、「そして」の機能は同じ「前に述べたことに付け加える言い方」なので、同じ項目に入れる。
- 6) 従来指摘されてきた、「いいさし」の用法だと考えられる。ここで文末表現の「けど」として扱う。
- 7) 横林・下村 (1988) も言うように、「「ので」は原因、理由などを客観的に表す用法」と論じている。
- 8) Jefferson(1972: 64)は「脇連鎖」(side sequence)について、下記のように述べている。進行中の活動(たとえば、ゲーム、ディスカッションなど)において、その活動の一部と感じられないかもしれないが、何らかの意味で関連性を持つと思われる出来事が起きることがある。そのような出来事は、当該の活動を中断(break)するものである。特に、「中断」は「終了」(termination)と対比されるものである。というのは、中断の場合は、進行中だった活動は再開されるからである。これは、進行中の連鎖における脇連鎖(side sequence)と呼んでもいいだろう。
- 9) 聞き取り不能であった部分に、その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。

### 参考文献

- 牧野成一他 (2001) 『ACTFL OPI 入門日本語学習者の話す力』を客観的に測る』アルク
- 泉子・k・メイナード (1993) 『会話分析』くろしお出版
- 呉秦芳 (2006. 11) 「接続表現」形式に見る 20～60 歳代の日本語母語話者の会話管理—日本語の座談会をデータにした事例研究— 『台大日本語文創新国際學術研討會論文集』台湾大学文学院日本語文学系
- Elaine Tarone, Andrew, Andrew D. Cohen and Guy Dumas 1976 'A closer look at some Interlanguage terminology'
- Jefferson, G. 1972. Side sequences. In David Sudnow(ed.): Studies in Social Interaction, 294-338. New York: Free Press
- 加藤英司 (1984) 「接続詞・接続助詞の使用頻度と日本語能力との関係」 『日本語教育』53号 日本語教育学会
- 森田良行 (1985) 「文章分析の方法」 『応用言語学講座 I』 明治書院
- 野田尚史他 (2002) 『複文と談話』 岩波書店
- 大竹芳夫 (2000) 「基準を表す情報—日本語「で」と「ので」及び対応する英語の接続表現の意味と機能—」 『信州大学教育学部紀要』99
- 梶村明子 (2004) 「自己発話力」を伸ばすことを目的としたタスクデザイン～コミュニケーション積み上げ型学習～ 『日本語教育学会春季大会予稿集』149-154 田中章夫 (1984) 「接続詞の諸問題—その成立と機能」 『研究資料日本文法④修飾句独立句編<sup>副詞 連体詞</sup>』 明治書院
- 宇佐美まゆみ (2003) 「改定版：基本的な文字化の原則」 (Basic Transcription System for Japanese e:BTSJ)
- 横林宙世、下村彰子 (2000) 『接続の表現』 外国人のための日本語例文・問題シリーズ 荒竹出版